

米軍基地周辺の街の多言語景観 —横須賀市・福生市・沖縄市・金武町を例に—

今村圭介・塚原佑紀

1. はじめに

本研究は、米軍基地を擁する東京都福生市、神奈川県横須賀市、沖縄県沖縄市、同県金武町を取り上げ、多言語状況が当該地域の基地周辺の商店街の言語表示（言語景観）にどのように反映されているかを明らかにしようとするものである。在住外国人を対象とした多言語表示には、受け入れ側である地域社会の在住外国人との関わり方が反映されていると考えられる。米軍基地との関わりは歴史的にも社会的にも地域間で異なるため、言語の使用や受容の度合いも異なり、その違いが言語景観に反映されていると考えられる。

米軍基地の街として知られる各地域ではどのような景観が形成されているのであろうか。そして、その共通点、相違点はどこにあるのだろうか。本稿では多言語状況を受容せざるを得ないであろう米軍基地周辺の商店街の言語景観の特徴を探っていく。

2. 先行研究

近年、多言語化しつつあるといわれる日本社会で、それが景観としてどのように表れているかを考察する研究が多く見られる。多言語景観は、「公共の場において様々な形で知覚される、外国語が複合的に形成する景観」（庄司 2009:18）と定義され、日本国内の各地においてその特徴や背景などが考察されている。

金（2009）では、日本社会やコミュニティの変容という観点から、在日コリアンのコミュニティ内の多言語景観を考察している。また、山下（2010）では、複数の外国人集住都市の言語景観について、言語表示サービスという観点から考察し、その特徴や問題点を明らかにしている。さらに庄司（2009）では国内外の多言語表記から、多言語社会における多言語の受容のしかたや言語間の勢力関係、その背景を論点として考察している。

本稿でも、その様な研究の流れをくみ、米軍基地周辺の多言語環境について考察していく。多言語景観は多言語化の認知や受容のあり方、あるいはそのプロセスの指標ととらえられてきた。米軍基地周辺の街は、これまで研究されてきている都市とは違い、多言語化が進みつつある地域ではなく、多言語化が起こったあとの地域である。そのような地域でどのような言語景観が形成されているのかを分析し、バックハウス（2011）をもとに多言語化が進みつつある地域との比較を試みる。

3. 調査の概要

3.1 当該地域と米軍基地の関わり

各地域の言語景観を考察する前に、各地域と米軍基地の関わりについて言及しておきたい。なお、以下の記述は、3.1.1 は金武町誌編纂委員会（1983）と金武町（2006）、3.1.2 はコザ市（1974）と沖縄市（2011）、3.1.3 は福生市史編さん委員会（1994）と福生市（2011）、3.1.4 は粟田（2011）を参考にしている。

当該地域と米軍基地の関わりの詳細については 3.1.1 以降に譲るが、金武町・沖縄市・福生市は 1945 年ごろ基地が建設され、1950 年代から 1960 年代にかけて基地経済が発展し、ベトナム戦争が終わった 1970 年代から基地経済が衰退し、経済の担い手が米軍関係者からほかへ移行していき、同時に地域とのつながりも弱くなっていったと考えられる。ただし横須賀市は米軍基地（米海軍横須賀基地）と地域住民との交流を現在でも非常に積極的に行っており、米軍基地を観光資源としても最大限に利用している点で他の三地域と異なっていると言えよう。

3.1.1. 金武町とキャンプハンセンの関わり

1945 年に現在のキャンプハンセンの場所に飛行場が作られ、1955 年にキャンプハンセンの建設が始まった。1959 年から未開の原野であったキャンプハンセンの正面ゲート前に歓楽街（「新開地」と呼ばれる）が整備された。とくにベトナム戦争が激化した 1964 年から 1968 年ごろは駐留兵も多く、新開地が最も栄えた時期であった。これを受けて第二ゲート前にも歓楽街の整備が始まったが、1968 年から始まった不景気のため整備は中断され、現在は住宅地となっている。

なお、キャンプハンセンは年に一回の基地一般開放「ハンセンフレンドシップフェスト」や、そのほかに地域との交流が行われている。

3.1.2. 沖縄市と嘉手納飛行場の関わり

沖縄市の前身である越来村はもともと農村であったが、基地建設とともに建設作業員や駐留兵が増え、基地依存経済に移行していくことになった。1950 年、日琉親善を目的とするビジネスセンターの建設が決定すると、現在の八重島区やセンター区など軍用地が解放され、現在のセンター大通りを中心に発展していくことになった。1950 年代は朝鮮戦争、1960 年代はベトナム戦争で駐留兵が増え、八重島区や照屋を中心にして歓楽街が形成され、また胡屋十字路やコザ十字路は軍道沿いであったために米軍や周辺地域の住民が買い物をしに集まり、発展していくことになった。しかし 1972 年の本土復帰後は、駐留兵の購買力が減り地元民が商業の対象となっていく。

現在は、嘉手納飛行場は年に一回程度「アメリカフェスト」として基地の一般公開が行われているほか、NPO 法人による基地訪問（センシンサポート 2014）や沖縄市センター商店街振興組合主催の「こどもアート日米交流フェスティバル」（琉球新報 2014 閲覧）など不定期ではあるが交流が行われている。

3.1.3. 福生市と横田基地の関わり

米軍進駐後、とくに朝鮮戦争が始まると町に米軍人を対象とした街娼と置屋があふれるようになったが、議会（福生町議会）は福生駅東側の一部にホテルや飲食店などの繁華街を設け、この地区以外の置屋や街娼などは徹底的に取り締まるようになった。この結果、米軍人向けの貸家が増え、基地外に多くの米軍人やその家族が居住するようになった。国道 16 号線横田基地前の商店街には 1970 年代までは横田基地の軍人や家族が土産物や日用品などを買いにやってきて顧客の 90%を占めていたが、1985 年以降は円高がすすみ不景気となり、閉店や業種の変更に追い込まれた。

現在は「アメリカ色の商店街」から若い世代や家族連れに親しまれる商店街に変わりつつあるが、1950～60 年代のアメリカ文化を残した街づくりを目指している。なお、横田基地は年に 2 回の基地の一般開放が行われている。4 月のサクラウォークと 8 月の日米友好祭である。このほか、基地内での英会話講習なども行われている。

3.1.4. 横須賀市と米海軍横須賀基地の関わり

横須賀はもともと旧日本軍の軍港として栄えていたが、米軍が進駐すると基地正面の国道 16 号線の裏通りに歓楽街が形成された（「どぶ板通り」）。やはり朝鮮戦争やベトナム戦争のころが最盛期であった。現在は米軍相手の店は減って、日本人相手の店が増えている。

現在、基地の一般開放は花火大会・ハロウィン・クリスマスのほか様々な形で行われている。このほかにサルサレッスン・英会話クラス・クリスマス装飾クラスなど様々な講座が開かれていて、これらの講座の募集は基地の前に大きく貼り出されたり、商工会のホームページで告知されたり、市民向けの広報誌に募集情報が載るなど積極的に行われている。そして横須賀中央商店街の人々と共に神輿を担ぐ「よこすかみこしパレード」や地域の消防と共に行う防火体験ツアーなど、地域住民と直接ふれあう機会も多く設けられている。横須賀市側も横須賀軍港めぐりクルーズやネイビーバーガーなど基地を観光資源として活用している。

2009 年には基地内に日米交流センターがオープンした。この施設は基地内の施設であるにもかかわらず入門パスなしで入ることができる。日本国内にある米軍基地では初めての交流施設である。このように、現在の横須賀市と米軍は非常に親密な友好・交流関係を維持している。

3.2 撮影地域

2009 年 8 月と 2012 年 4 月～5 月に、米軍基地周辺の市街地において店舗看板等を撮影した。福生市では 2009 年 8 月に、基地に面した国道 16 号線沿いの商店街と基地から少し離れた旧赤線地域で撮影を行った。横須賀市では 2009 年 8 月 9 日に基地の正面ゲート前の通りと、どぶ板通り商店街、中央通り商店街で撮影を行った。金武町では 2012 年 4 月 30 日に基地の正面ゲート前の通りを中心に撮影を行った。沖縄市では 2012 年 5 月 1 日にゲート通り（基地の正面ゲート前の通り）、中央パークアベニュー

一、国道 330 号線沿いを中心に撮影を行った。

各基地の基本情報は表 1（以下）のとおりである。

表 1 の情報は、とくに断りのない限り、横田飛行場については福生市役所（2011）を、横須賀海軍施設については横須賀市（2010）を、キャンプハンセンについては金武町（2006）を、嘉手納飛行場については嘉手納町（2012）に基づいている。

なお「英語表記」には、店名がアルファベット表記になっているだけのものは含まず、看板等の英語表記の文面から、どのような業種か分かるものだけを対象にした（例えば、以下の図 1 と図 2 は両方とも横須賀市内で撮影したものだが、図 1 は看板からは具体的にどのような業種の店舗か分からない。これに対して図 2 は「vegetable shop」とあり、この店舗が野菜を販売していることは伝わる。今回の調査では図 1 のような看板は「英語表記」とはせず、図 2 のような看板を「英語表記」として扱った）。



図 1. 横須賀市の服飾品店の看



図 2. 横須賀市の青果店の看板

表 1. 各基地の基本情報

	横田飛行場	横須賀海軍施設	キャンプ ハンセン	嘉手納飛行場
軍別	空軍	海軍	海兵隊	空軍
接收年月	1945 年 9 月	1945 年 9 月	1945 年 6 月	1945 年 4 月
所在地	福生市・武蔵村 山市・立川市・ 昭島市・羽村 市・瑞穂町	横須賀市	名護市・恩納 村・宜野座 村・金武町	嘉手納町・沖 縄市・北谷町
土地面積(ha)	7,136	236,3	5,140.4	1985.5
基地内人口(人)	11000	12,878	6000	17800
日本人従業員数	2100	5,135	493	2834
一般基地開放	年 2 回	月 1 回程度	年 1 回	年 1 回

4. 米軍基地の街としての表記

4.1 業種別の比較

まず、総務省（2006）に基づき表 2 で各地域における英語表記の看板等をもつ店舗について、業種ごとに分類して示した（英語表記の看板等を持つ店舗が一店舗でもあれば●で示した）。

表から分かるように業種は多岐にわたっているが、業種数は、横須賀市、沖縄市、福生市、金武町の順に多い。これは街の規模に関係すると思われる（人口で比較すると、最も多いのは横須賀市で 408,934 人、次に沖縄市で 138,960 人、福生市は 58,809 人、金武町は 11,442 人）。街の規模が多ければ商店街の規模が多くなり、必然的に英語表記が見られる業種が多くなる。また横須賀市では、「au」や「すき家」など全国展開の店の看板でも詳細な記述の英語表記が見られ、米軍関係者が地域に受け入れられている様子が窺える。

英語表記が特に多い業種は、飲食店や、遊興飲食店、服飾店など、両替商など、米軍関係者が利用する可能性が高いものであった。服飾品を扱う店舗に装飾的なアルファベット表記が用いられやすいという指摘があるが（染谷 2002、2009）、米軍基地の周辺では図 3、図 4 のように業務内容の詳細な記述など実用的な表記が目につく。また、情報は看板だけでなく張り紙などでも提供されている。

また、飲食店などに関しても同様に実用的な表記が見られる（図 5）。バーなどの飲食店の中には完全に米軍関係者にむけられているような場所もあり、英語モノリンガル表記になっている（図 6）。

さらには、店としては日本人が客層だと思われる店の中でも、英語を大々的に使う店舗も見られる（図 7）。これには、米軍基地の街として、異国情緒を出したいという店舗の思惑があると考えられる。ただし、これらの英語表記には誤用も見られる。図 8 や図 9 がその例である。

図 8 はカラオケ店の張り紙で「平日は無料、ただしお酒を注文した客に限る」という旨を伝えたいのだと考えられる。しかし、**drink** の過去形 **drank** を形容詞的に用いている点で文法的に誤りがあり、また **drank** を **drunk**（過去分詞）にして **drunk customer** にすると「泥酔客」となり、やはり店側の意図が伝わらない可能性がある。図 9 は装飾品店の表示だが、眼鏡の英語表記が **GLASS** になっていて、店側の意図が伝わらない可能性がある（眼鏡は英語では **glasses**）。

このように英語表記に誤りが見られる要因として、少なくとも以下の二つを考えることができる。一つは、実際に米軍関係者などが客として来るため英語表記を行っているが、店員の英語運用能力が不足していること。もう一つは、実際には米軍関係者が客として来ることはあまりないが、「基地の街」であることを観光資源として利用しており（つまり英語表記は装飾）、したがって英語表記に誤りがあってもあまり問題にならないこと。この二点が、英語表記の誤りが現れている要因だと考えられる。

表 2. 各地域における、英語表記が見られた業種

業種	横須賀市	沖縄市	福生市	金武町
バー	●	●	●	●
男子服小売業	●	●	●	
婦人服小売業	●	●	●	
駐車場業	●	●	●	
専門料理店	●	●	●	
その他の洗濯・理容・美容	●	●	●	
補助的金融業	●	●		●
その他の飲食店	●	●		●
衣服裁縫修理業	●	●		●
百貨店, 総合スーパー	●	●		
その他の各種商品小売業	●	●		
呉服・服地・寝具小売業	●	●		
不動産賃貸業	●	●		
その他の娯楽業(カラオケ)	●	●		
市町村機関	●	●		
その他の身の回り品小売業	●		●	
スポーツ用品・楽器小売業	●		●	
映像情報制作・配給業		●		●
その他非営利的団体		●		●
療術業		●	●	
舗装工事業	●			
移動電気通信業	●			
鉄道業	●			
じゅう器小売業	●			
不動産代理業・仲介業	●			
貸家業, 貸間業	●			
食堂, レストラン	●			
美容業	●			
事業協同組合	●			
労働団体	●			
その他外国公務	●			
映像情報制作に附帯するサービス業		●		
写真機・時計・眼鏡小売業		●		
行政書士事務所		●		
社会教育		●		
その他の修理業(時計修理)		●		
民間放送業(有線放送業を除く)			●	
家具・建具・じゅう器等卸売業			●	
自動販売機による小売業			●	
損害保険業			●	
旅館, ホテル			●	
喫茶店			●	
配達飲食サービス業			●	
洗濯業			●	
旅行業			●	
キリスト教系宗教			●	
酒場, ビヤホール				●
遊戯場(ゲームセンター)				●
経済団体(商工会)				●
都道府県機関				●



図 3. 横須賀市の服飾品店の看板

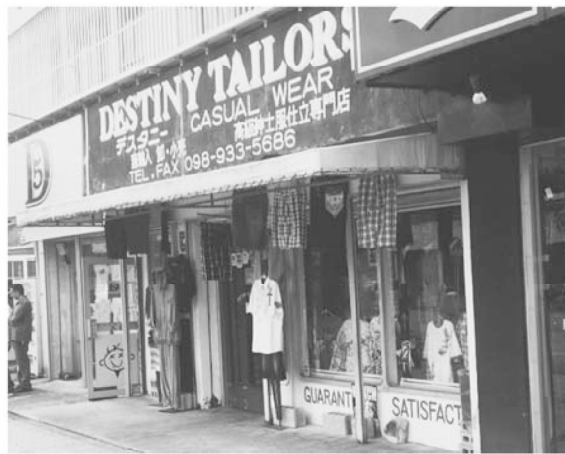


図 4. 沖縄市の服飾品店の看板



図 5. 沖縄市の飲食店の看板



図 6. 金武町の飲食店の看板など



図 7. 福生市の服飾店の看板



図 8. 沖縄市のカラオケ店の張り紙



図 9. 横須賀市の服飾品店の表示

4.2 バイリンガル表記の特徴

次に、両地域の看板等の英語表記の中でも、特にバイリンガル表記のものを取り上げて分析する。商店街の看板等は営利目的で設置されており、当該地域に外国人の居住者が多くいれば、その人たちをターゲットにした外国語表記が増えるのは当然である。その点では4地域での相違はない。

しかし、その英語表記の情報量と日本語表記の情報量は必ずしも一致するわけではない。それは、地域社会の米軍関係者（基地）に対する受容態度や、地域社会が軍関係者と関わりが深いことなどを表していると言える。関わりが深ければ日英の両言語が同等に使用され、関わりが弱ければ英語使用は部分的なものにとどまるのではないかと考えられる。

ここでは例として福生市・横須賀市におけるバイリンガル表記の看板等をとりあげ、特に日／英の情報量の差に着目して分析する。福生市と横須賀市は同じく首都圏にある基地の街で、基地の成立や経済発展の経緯等で多くの共通点があるが、基地と地域住民の交流や地域における基地の活かしかなどは異なる（詳細は3.1参照）。その様な福生市と横須賀市の共通点と相違点が言語景観に現れるのではないかと考え、考察を行っていく。

表3と表4は横須賀市・福生市それぞれにおける日／英バイリンガル表記の看板等の情報を、店舗ごとにまとめたものである（一部を抜粋して記載）。

横須賀市は日本語と英語の情報が基本的に一致している。また、表3のように「つけめん」そのものについての英語の説明は米軍関係者への配慮だと考えることができる（「つけめん」そのものについての日本語での説明はない）。

表 3. 横須賀市のバイリンガル表記の看板の内容の例

業種	英語表記	日本語表記
1. 美容院	Yokosuka318 EXTENTION 1piece — 9pieces ¥840/piece Manufactured by hands without using machines	1 本 1 本機械を使わない丁寧な手 作業による施術
2. 一般 飲食店	OPEN Special Miso-Ramen 830yen Thick bean paste Ramen noodles Tsuke-Men 780yen You can take it to soak in the special soup 780yen	営業中 濃厚みそらーめん 香味（こうみ）つけ麺
3. 一般 飲食店	You can use a parking lot of Daiei free. Please show a parking ticket.	当店でご飲食頂いた御客様にダイ エーの 2 時間無料駐車券を差し上 げます。 お会計の際にお申し付け下さい。

表 4. 福生市のバイリンガル表記の内容の例

業種	英語表記	日本語表記
1. 一般 飲食店	UnQuinto LUNCH MENU A Course ¥1000	（ガーリックトースト、ドリンク付き） 好きなパスタをメニューからお選び 下さい。
2. 一般 飲食店	AM10~PM8 WEDNESDAY-CLOSE	電化製品・貴金属・時計・楽器・ブラ ンド品・商品券 質買取たからや 定休日一水曜
3. 駐車場	Fussa-Musasino Promote Association PARKING 200YEN / 1 HOUR. INFORMATION : 042-553-6633	福生武蔵野商店街振興組合駐車場のお 知らせ 国道 16 号沿い商店街、このマークのあ るお店で 3000 円以上お買い上げのお 客様は、お会計の際駐車券をご提示下 さい。1 時間の無料サービス券を発行 いたします。 福生武蔵野商店街振興組合

福生市は日本語表記が主体で英語表記は限定的である。例えば表 4 のレストランの看板は、ランチが 1000 円であることは英語で書かれているが、そのセットの内容やパスタが選べるなどの付加的な情報は日本語のみで書かれている。表 3 を見ると、駐車場の情報で、料金が 1 時間 200 円であることは英語で書かれているが、買い物をする無料になるという、より付加的な情報は日本語のみで書かれている。つまり福生市の場合、日本語表記のほうに情報が偏っていて、英語表記は必要最低限にとどまっている。

このようなバイリンガル表記の二言語間の情報量の差は、米軍関係者がどの程度地域に受け入れられているかの指標になると考えられる。日／英の情報量が基本的に等しく、英語表記のほうの詳細な場合もある横須賀市は、英語表記が限定的な福生市より、より米軍への配慮が行き届いており、深い関わりがあると考えられる。

4.3 禁止表記

庄司 (2009:39) では、「外国人が多く住む地域では、外国人にむけた犯罪や監視の警告、商店などの来店拒否のメッセージが少ないながらも外国語で表示されることがある」と指摘しているが、米軍基地の周辺の街も状況は似ているため、例外ではない。日本語と日本での公共マナーが分からない外国人に対しては、日本語ではなく外国語で伝達するより他にないと認識されているのが要因であろう。

図 10 は福生市の自転車店の張り紙である。「No Kids」と一言のみ書かれている。米軍関係者の子供が保護者を同伴せずに来店して困っているために、張られたものだと考えられる。図 11 は横須賀市のショッピングモール内の看板である。ローラースケート、自転車、スケートボードの乗り入れ、飲酒・喫煙、飲食などの禁止が書かれている。バイリンガル表記ではあるが、英語表記のフォントが大きくて情報量も多く、米軍関係者にむけられていると考えることができる(日本語では飲食、英語では飲酒、のように情報も異なる)。図 12 はゴミ捨て禁止の張り紙だが、英語モノリンガル表記になっている。

つまり米軍基地周辺の街では、米軍関係者との共生が模索されている一方で、公共マナーが守られないという問題があり、それが言語景観として表出していると考えられる。その点で、外国人が多く集まる他地域の言語景観と共通していると言える。



図 10.福生市の自転車店の張り紙



図 11.横須賀市ショッピングモール看板



図 12. 沖縄市の一角の看板

4.4 当該地域の多（他）言語表記

米軍基地周辺では、米国人以外の外国人も多く居住する傾向にあり、それも多言語景観を形成する一要因になっている。その傾向は、福生市と沖縄市で見られた。図 13 と図 14 は沖縄市におけるインド家具店と、洋服店であり、主に米軍関係者が顧客であると考えられる。洋服店はインド人が経営する店や、アフリカ出身の経営者による Hip-Hop 系の店などがあるが、福生市と沖縄市に見られ、英語表記に地域の複雑な状況が映し出されている。横須賀市の洋服店に関しては、日本人経営者がほとんどを占め、表記もバイリンガル表記が多かった。

また、福生市ではその様な店舗の多国籍性が影響してか、英語以外の言語による表記も目立つ。図 15 では、タイレストランの看板がタイ・英・日の三言語表記で書かれている。また、図 16 は、韓国系の食品店の表記が韓国語モノリンガル表記で行われている。その他にもタイ語、韓国語、中国語を中心として複数の多言語表記が見られ、米軍基地の周辺の街が、多民族の街としての顔を持っていることもわかる。



図 12. 沖縄市のインド系家具店の看板



図 13. 沖縄市のインド系服飾店の看板



図 15. 福生市のタイレストランの看板



図 16. 福生市の韓国系食品店の看板

5. 米軍基地の街の多言語景観が示すもの

ここまで、米軍基地周辺の街における多言語景観について記述・考察を行ってきた。ここでは、国内のその他の都市との比較・考察を行っていきたい。

バックハウス（2011）は、「誰によつての多言語景観か？」「誰のための多言語景観か？」という二つの観点から、東京における多言語景観を分析・考察し、日本における多言語景観を作る要素を以下の表 5 にまとめている。バックハウス（2011）は、この要素について以下のように説明している。

「西洋化」は日本人が日本人に対して行っているもので、日本語以外の外国語とくに英語に対する好意的態度の現れであるとしている。「国際化」は日本人が外国人に対して行っているもので、1980 年代以降、東京を「国際化」させるために行われた公的言語政策の現れであるとしている。「多民族化」は外国人が同じ言語を使用する外国人に対して行っているもので、外国人コミュニティの発生によるものであるとしている。「アジア化」は外国人が日本人に対して行っているもので、2000 年代以降のアジアとくに韓国に対する人気の現れであるとして、新大久保におけるハングル表記の増加の例を挙げている。これら「西洋化」「国際化」「多民族化」「アジア化」という四つの要素が東京の多言語景観を形作っており、この多言語景観から日本人と日本人以外の人々との関わりが伺われるとしている。

表 5. 日本の多言語景観を作る要素（バックハウス 2011:127 の表を抜粋）

	誰によつて？	誰のために？
(1) 「西洋化」	日本人	日本人
(2) 「国際化」	日本人	外国人
(3) 「多民族化」	外国人	外国人
(4) 「アジア化」	外国人	日本人

今回の調査で得られた米軍基地周辺における多言語景観について、バックハウス（2011）にならって「誰によって」「誰のために」という視点で分析・考察を行ったが、米軍基地周辺における多言語景観の構成要素はバックハウス（2011）が挙げている要素とは異なる。

今回の米軍基地周辺における多言語景観と、バックハウス（2011）などで分析・考察されている東京などの各都市の多言語景観の状況で最も異なっているのは、基本的に東京などでは多言語化が進行中であるが、基本的に米軍基地周辺では多言語化が既に起こったあとである、という点である。

3.1 で各地域と米軍基地の関わりをとりあげたが、金武町・沖縄市・福生市・横須賀市における多言語化はいずれも似たような経過をたどっている。いずれの地域も、おおむね、1945 年の米軍進駐・基地建設をきっかけに多言語化が始まり、1950 年代の朝鮮戦争や 1960 年代のベトナム戦争のころに（形成された歓楽街などをとおして）地域と米軍との交流がもっともさかんに行われて多言語化が促進され、ベトナム戦争終結後は駐留兵の減少が起こっている（地域との交流も 1950～60 年代と比較すると減っている）と言える。

したがって米軍基地周辺地域の多言語景観は、多言語化したあとの状況を示しているのとらえることができる。ここで、この多言語景観を構成する要素を考えてみると、基地観光都市、基地との共存、多民族性を挙げることができる（表 6）。

表 6. 米軍基地周辺の街の多言語景観が表す要素

	誰によって？	誰のために？
(1)「基地観光都市」	日本人	日本人
(2)「基地との共存」	日本人	外国人
(3)「外国人コミュニティ」	外国人	外国人

「基地観光都市」の要素では、他言語表記は日本人による日本人に対する表記であり、米軍基地を観光資源として利用していることの現れだと考えられる。例えば、福生市の商店街は 3.1.3 でも言及したが、若者や家族連れを顧客にしようとしているが、「アメリカ一色の商店街」からの変化を目指す一方で、米軍基地の街であることを活かそうとしている。そこで、日本人観光客に向けて、英語表記が装飾的に使われることも多くなると考えられる。観光都市として米軍基地を利用しようという意図が商店街の看板に反映され、多言語景観として表出するのである。

「基地との共存」の要素では、他言語表記は日本人による外国人（米軍関係者）に対する表記であり、米軍関係者や基地との共存を表していると考えられる。米軍関係者は顧客であった、また現在も顧客になっており、このように経済活動の中での共生が多言語景観（英語表示）に反映されていると言えよう。禁止や警告の表記も多く見られるが、このような共生に向けての問題や解決の取り組みなどが多言語景観に現れ

ていると考えられる。

「外国人コミュニティ」の要素では、他言語表記は外国人が外国人に対して行うもので、米軍関係者と米軍関係者を相手に商売をしている外国人の存在、そのような米国人以外の人たちを含む外国人コミュニティの存在を反映していると考えられる。米軍基地周辺は米国人以外の外国人住民が商売をすることも多いが、とくに英語表示が行われている時、多くの場合は顧客が米軍関係者と考えられる。また、そのように米軍関係者を相手に商売をしている米国人以外の外国人が結果的に集まり、コミュニティを形成している場合もある（これが英語以外の多言語表示に現れている）。このように、米軍基地をめぐって形成された多民族性も多言語景観に反映されていると考えられる。

以上のように、一口に多言語景観と言っても、言語景観はその地域の歴史や社会状況を体現するものであり、（今回は東京と米軍基地周辺のみを比較したにとどまるが）多言語景観を構成する要素は地域ごとに異なることがわかる。

6. まとめと今後の課題

本論文では、米軍基地周辺4地域の多言語景観について、どのような業種に英語表記が見られるのか、情報の内容が地域間でどのように異なるのかを分析した。また、多言語化が進む他地域とどのような相違点・共通点があるのかなどを、バックハウス（2011）の研究をもとに東京との比較を通して考察した。

米軍基地周辺4地域の多言語景観における表示を検討すると、街の規模や米軍関係者と地域との関わりの深さによって英語表示の量や質が異なることがわかった。また、東京との比較から多言語景観を構成する要素が異なることがわかった。

以下に今後の課題を簡単に示す。一つは、自治体の公共サービス（行政）との関わりについてである。今回は店舗看板等の分析が中心であり、基本的に民間における基地と地域住民の関わりを見た。これが自治体の公共サービスと関連しているのか、関わりがあるとすればどのように関わっているのかは興味深い。

もう一つは、英語を用いた店名についてである。今回は多言語表示（英語表示）について米軍関係者向けだと思われる実用的なもののみを扱ったが、福生市では店名だけが英語表記であるという例も多く見られた。住民の話からは、福生市は米軍にここがれて移り住んできた人が多く、そうした人が作った店も多いという情報があった。このことから基地周辺の街作りを考えたときに、アルファベットや英語表示の情的価値が高いことが考えられるが、その点を他地域と比較・考察することで、より米軍基地周辺の街の多言語景観の特徴が明らかになるのではないかと考えられる。

参考文献

栗田尚弥（2011）『米軍基地と神奈川』有隣堂

沖縄県庁（2014.2.11 閲覧）「沖縄県」<http://www.pref.okinawa.jp>

沖縄市役所総務課市史編集担当（2011）『ヒストリート』沖縄市役所

- 嘉手納町（2012）「嘉手納町ホームページ」<http://www.town.kadena.okinawa.jp>
- 金美善（2009）「言語景観における移民言語のあらわれ—コリアンコミュニティの言語変容を事例に—」庄司博史他（編）『日本の言語景観』三元社 pp187-205
- 金武町（2006）「金武町公式 Web サイト」<http://www.town.kin.okinawa.jp>
- 金武町誌編纂委員会（1983）『金武町誌』金武町
- コザ市（1974）『コザ市史』コザ市
- 庄司博史（2009）「多言語化と言語景観—言語景観からなにがみえるか」庄司博史他（編）『日本の言語景観』二元社 pp17-52
- スタジオ解放区（2009）「コザ十字路新聞 十字路特集号」スタジオ解放区
- センシンサポート株式会社（2014）「はい！ OKINAWA 国際交流サポートです！」
<http://ssc.ti-da.net/c145796.html>
- 染谷裕子（2002）「看板の文字表記」飛田良文・佐藤武義（編）現代日本語講座 6 文字・表記 明治書院 pp221-243
- 染谷裕子（2009）「言語景観の中の看板表記とその地域差—小田急線沿線の実態調査報告」庄司博史他（編）『日本の言語景観』三元社 pp95-122
- 総務省統計局（2006）平成 18 年事業所・企業統計調査産業分類一覧
<http://www.stat.go.jp/data/jigyoku/2006/bunrui.htm>
- バックハウス・ペート（2011）「言語景観から読み解く日本の多言語化—東京を事例に」中井精一・ダニエルロング編『世界の言語景観 日本の言語景観 景観の中のことば』桂書房
- 福生市史編さん委員会（1994）『福生市史 下巻』福生市
- 福生市役所（2011）「東京都福生市公式ホームページ」<http://www.city.fussa.tokyo.jp>
- 山下暁美（2010）「外国人集住都市の言語景観—言語表示サービスの現状—」『明海大学外国語学部論集』22:17-34 明海大学
- 横須賀市役所（2010）「横須賀市ホームページ」<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp>
- 横田・基地被害をなくす会（2011）「横田・基地被害をなくす会」
http://www.geocities.jp/yokota_nakusukai
- 琉球新報社（2014.2.11 閲覧）「日米児童 1 0 0 人アートで交流 最高賞は基地内小」琉球新報 2013 年 12 月 28 日
<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-217232-storytopic-7.html>

（いまむら けいすけ・長崎大学多文化社会学部）
（つかはら ゆうき・鹿島学園高等学校）